

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話：070-1503-6401/044-988-0004

<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo>

第 179 号

白井義胤翁
を訪ねて 5

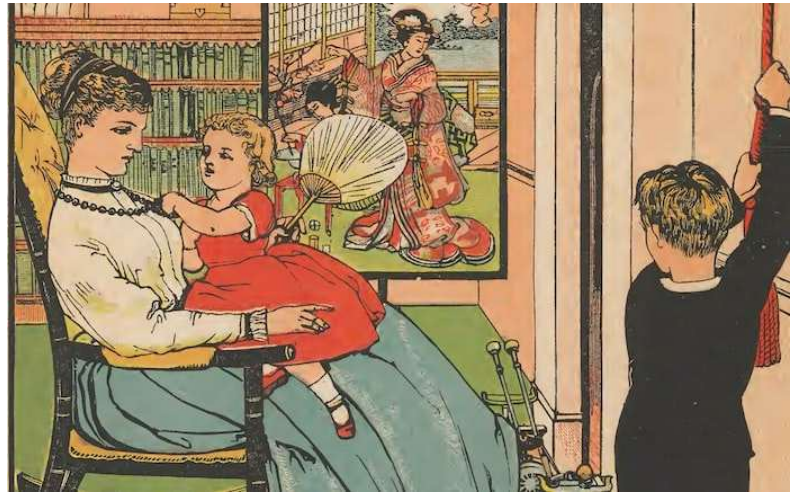
義胤氏の挑戦

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

業容の拡大と生活の変化

義胤氏の欧米人相手の古美術品売買は、順調に拡大を続けました。信用を重視した彼の会社には、欧米の富豪を顧客に持つバイヤーからの注文が途切れることなく続き、注文に応じきれないことも稀ではなかったのです。そんな時バイヤーは、ムッシュ・ヨシタネを信用して、掘り出し物が手に入るのを辛抱強く待つことを厭わず、義胤商会(仮名)からの吉報を待ってくれたのです。欧米でのジャポニスムの流行は、20世紀初頭まで長期にわたって続き、次第に日本文化への理解も深まっていったのです。

右の絵をご覧ください。この絵はイギリスの挿絵画家ウォルター・クレインが19世紀末に描いた『靴の留め金とめて』と題する子供向け絵本の挿絵です。幼な子を抱く母親の手には団扇があり、部屋には額装された歌川豊国作と思われる浮世絵が飾られています。部屋と婦人の雰囲気からして中産階級の家庭が描かれていることが分かります。絵本の主な購入層が3~4名の召使を抱える中流のブルジョワ家庭だったことが、透けて見えます。深化したジャポニスムがイギリスにも広まり、さらに中産階級にまで広く行き渡っていたことが読み取れます。



ウォルター・クレイン『靴の留め金とめて』の挿絵

義胤商会の商いは、見事に時流に乗りました。それでも名門白井家の再興を託された義胤氏には、なお満足行くものではありませんでした。義胤氏は白井家の昔日の栄光を取り戻すには、大地主となることで、地租中心の徴税システムの下で、多額納税者として世に知られる榮譽に輝くこと。爵位を持つ上流階級の縁戚に連なること。資産家たることを世に認められたことの証となる名誉職に就くこと。この3点を実現しなければならないと決意し、好調な美術骨董品の売買にのめり込んで、資産家への道に邁進したのです。30代半ばを過ぎ、壮年の域に達して精力的に活動する義胤氏は、当時の生活に余裕のある男たちのご多聞に漏れることなく、妻以外の女性と懇ろになり、その生活の面倒を生涯見続けることを男の甲斐性と考える、当時の富裕な男性に共通する考えの持ち主でもありました。

義胤氏が第二夫人なみ女との間に、次男の公胤さんをもうけたのは1884(明治17)年、40歳の時でした。私が知己を得た義胤氏の曾孫、小林一夫氏の祖父の誕生です。夭折したお子さんについては史料がないのですが、義胤氏の成人したお子さんは、男性5人に女性1人の6人だったことが分かっています。第一夫人(正妻)やす女を母とする一人娘の美智子さん(明治25年-1892年生)は、母の実家鏑木家の養女となって、鏑木の家名を継ぎました。3男の正胤さんは、第三夫人を母として明治23(1890)年に生まれ、4男の直胤さんは明治28(1895)年(母は第一夫人やす女)、5男の平胤さんは、第四夫人を母として明治32(1899)年に生まれています。

義胤氏が麻布笄町に麻布御殿と呼ばれる広大なお屋敷を構えた時期がいつかは、はっきりしないのですが、明治20年代末頃には、出身地の柿生村の人々にも広く知れ渡っていたのですから、遅くも明治20年代初頭であろうと考えられます。3千坪の敷地を持つ邸宅には、渡り廊下で繋がるいくつかの区画が設けられており、正妻以外の婦人たちは夫々の区画で子息と起居を共にしていました。義胤氏は庶子も嫡子と同様に扱い、とりわけ当時最高の教育が受けられるように取り計らっています。日本社会の大きな転換期に、諸外国に伍していくには、まず何よりも次世代に高い教育を授けることが欠かせないと、明治日本の指導者たちと同質の考えを持っていたのです。

続く

シリーズ
麻生区の地名 その4

下麻生の地名

菊地恒雄(日本地名研究所 研究員)

上麻生と下麻生の境に月読神社があります。両村の村社であると同時に、大正 5 年に両村内の多くの神社が月読神社に合祀されて村社麻生神社と称しましたが、昭和 8 年に旧の月読神社に復しています。伝えでは創建は室町時代といわれ、土豪の小島佐渡守が伊勢大神宮の別院月読宮を分祀勧請したものといえます。上麻生字亀井と下麻生字台にあり、由緒には両村の住所が記載され、参道が両方の村にあります。

台には王禅寺の別院の明王山不動院があり、『風土記稿』には不動堂とあります。地元では麻生不動として知られ、毎年 1 月 28 日の初不動の日には、関東一円の「納めのだるま市」として賑わいます。木賊不動(とくさふどう)ともよばれ、火防の神として信仰されています。台の北西に字原があり、麻生台団地周辺です。原は墾る(はる)で切り開かれた土地という意味で、麻生台団地の崖斜面から横穴墓が発見されています。

真福寺川沿いの地域を字花島といいます。ハナは端で山の端のことで、島はやや微高地のエリアを指します。王禅寺境にある真福寺川に架かる橋を新並木橋といい、この付近を『風土記稿』に小名並木とあります。花島の東北に字籠口(ろうぐち)があります。小名に「ろふ口」とあり、籠口ノ池のある谷戸があることから、「籠馬谷戸」の入口を指すと思われます。川崎市域の丘陵部に「ろうば」という地名が多くあり、籠場や籠馬、牢場などの字を当てています。谷戸の奥まった所で、馬の囲い込みに適した地ともいわれています。

籠口には小名塚畑(つかばたけ)が『風土記稿』にありますが、詳しいことはわかっていません。村境に塚があったと思われます。畑はハタケではなく、端のことで村境のことかもしれません。

上麻生字亀井に接するところに、下麻生字国領があり、地続きの地域であったことがわかります。

国領の東側が字日枝で下麻生の村の中心であった所です。山王社があり、明治初年に日枝社と改称しています。大正 7 年に月読神社に合祀され、跡地は東柿生交番の辺りにあたります。

鶴見川の南岸側に字柳里(やなぎさと)があります。川沿いに柳が多く生えていたところの地名かもしれませんが、地元では通称地名恩廻(おんまわし)といいます。鶴見川が氾濫し三輪村境に沿って流れていました。その後流路が北に移り、その流路跡をオンマワシと呼び、川の水量が増えると自動的に旧流路に流れ込むことからの呼び名です。現在は、神奈川県の調整池として地下に雨水貯留管を備えた恩廻公園として活用されています。

恩廻の流れが鶴見川の現在の流れに合流する付近を字島(しま)といいます。この場所で真福寺川と鶴見川が合流しており、堆積された土砂が作りだした自然堤防の地であった所からの地名と思われます。『風土記稿』に小名青戸袋(あおとぶくろ)があり、袋は川の流路が蛇行して袋状になった場所をいい、青戸はあるいは王禅寺の旧家青戸家がそこを所有していたということなのかもしれません。

真福寺川を挟んで東側が字入生(いりゅう)で、小名にも入生があります。イリュウはイリヨウの転訛で井料のことで、用水の管理料に宛てられた地という意味で、これは国領(国衙領)と関係する地名といえます。

早野村に子ノ神社があり、その村境に下麻生の小名に子ノ神(ねのかみ)があります。またこの付近を小名おどり場といい、字にも踊り場があります。神事が行われた地かとも思われますが、何も伝えられていません。

鶴見川と早野川が合流する付近を字押切(おしきり)といいます。鶴見川は洪水を繰り返し、流路がこの付近で変わったことが想像され、現在は南に流れていますが、上麻生横浜線の道路を含めた一帯が鶴見川の流路であったことによる地名と考えられています。



下麻生村の字図

『ふるさとを語る』—柿生・岡上のあゆみ—よりトリミング

シリーズ
教育の歩み 番外編

ゆとりの教育をめぐって (5)

小林 基男 (柿生郷土史料館専門委員)

平成14(2002)年を実施年度とする「学習指導要領」は、実施4年前の平成10(1998)年12月に発表されました。「ゆとりの教育」とネーミングされた教育課程の開始が告げられたのです。下に掲げた表は、「学習指導要領」に別表として

別表第2 (第54条関係)

区 分	必修教科の授業時間数									道徳の授業時間数	特別活動の授業時間数	選択教科等に充てる授業時間数	総合的な学習の時間の授業時間数	総授業時間数
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術・家庭	外国語					
第1学年	140	105	105	105	45	45	90	70	105	35	35	0~30	70~100	980
第2学年	105	105	105	105	35	35	90	70	105	35	35	50~85	70~105	980
第3学年	105	85	105	80	35	35	90	35	105	35	35	105~165	70~130	980

備考 この表の授業時間数の1単位は、50分とする。

週1時間の授業を年間続けた時に1単位となります。小学校や中学校は単位制をとりませんので、年間で何回授業をすべきかが数字として表記されるのです。別に年間の授業は、35週を下回らないようにとされていますので、週1時間の授業を1年間続けると35時間となります。ですから年間140時間というのは、毎週4時間授業があるという風に受け止めてください。こう見ると、国語は1年生のみ週4時間で2,3年生は週3時間。数学と外国語(英語が殆どですが、フランス語やドイツ語なども可)は全学年週3時間。社会と理科は、1,2年生は週3時間ですが、3年生では社会は週2時間プラス50分授業で15回分、理科は週2時間プラス50分授業で10回分となっています。音楽と美術は、1年生では週1時間プラス10回分、2,3年生は週1時間。技術・家庭科は、1,2年生は週2時間で3年生は週1時間。保健体育は全学年週2時間プラス20回分と指定されています。ここに道徳の時間と特別活動(主にHRなどの学級活動)の時間が各1時間加わり、さらに選択科目と「総合的な学習の時間」を合わせて、1年生約3時間、2年生4時間と15週、3年生6時間と25週分が充てられます。合わせて年間の授業時数が980時間です。1週間では28時間、1単位時間は50分ですから毎週28時間、月曜日から金曜日までの5日間の内、6時間の日が4日、1日が4時間となります。

残念なのは、各教科の授業時数を削って新たに導入した「総合的な学習の時間」をうまく活用することが出来なかったことです。選択科目は、生徒一人一人の希望に応じて、ある教科の補習的な内容のものと得意な教科を深める内容のものを選ぶ時間ですが、「総合的な学習の時間」は1年生から3年生まで少なくとも週2時間が確保されており、選択教科がこちらに食い込むことが出来ないように定められていました。この時間にかかる文部省の改革派官僚の意気込みが伝わってきます。

「総合的な学習の時間」は、初めて導入された時間ですから、どのような構想なのか、どんな内容にすべきか、各学校に周知する必要がありました。そのための時間は発表から実施までの3年3ヶ月です。文部省も学識者に協力を願って議論を深め、平成11(1999)年9月に『中学校学習指導要領解説総則編』を発表、次のように記述しました。「総合的な学習の時間は、各学校において創意工夫を凝らした学習活動を行うものであること…この時間の学習活動が各教科等の枠を超えたものであることなどから…国が目標、内容等を…位置づけることは適当でない。…」[各学校において、この時間の趣旨、狙いなどを踏まえ、目標や内容、全体計画を作成し、創意工夫を生かした学習活動を行う…]その上で、「地域や学校、生徒の実態等に応じて、横断的・総合的な学習や生徒の興味・関心等に基づく学習とし…」[自ら学び、自ら考え、主体的に判断して、よりよく問題を解決する資質や能力を育てる…]と。

こうした観点から、「総合的な学習の時間」については、各教科のような教科書は用意せず、試験による評価も行わず、担当する教師に適切な助言をするよう投げかけ、個々の生徒がこの学習を通じて、どのような経験をし、どのように考えを深め、どんな成長を遂げたか、そしてこの時間で身に着けたことを各教科の学習にどのように活かしたかを、文章で評価することを求めたのです。別々に学んだ教科学習に横串を通して生かして使えるようにすることを狙った深謀遠慮が伺えます。しかしそれは、一片の文章やわずか数時間の研修会で多数の教員に浸透できるような簡単なものではありませんでした。

続 く

柿生・岡上の
地域文化財

王禅寺(2) 琴平神社の「狛犬」

琴平神社 宮司 志村幸男

神社に参ると、どこの神社でも必ずと言っていいほど一對の狛犬が出迎えてくれます。

狛犬は「高麗犬(こまいぬ)」とも書きます。高麗とは、朝鮮半島に十世紀～十四世紀頃にあった王国で、日本に渡ってきた、霊力を持った犬なのです。

狛犬のルーツは紀元前 6000 年のメソポタミア文明にあり、ピラミッドの前に座るスフィンクスは狛犬の祖先なのです。ライオンを霊獣にする文化は、世界中に形を変えて広まりました。ヨーロッパ→ギリシャ→中央アジア→インド→中国を経て(また、朝鮮半島を経由して)日本にまで入ってきました。

日本で狛犬が誕生するきっかけになったのは、仏教が伝来したと同時に仏像も入ってきて、前方に二頭の獅子を配置した事から、が始まりのようです。

昔から、獅子が神を守る霊獣である、という考えは古代オリエントの頃と変わりがない形で伝わってきたのです。獅子はライオン、狛犬は犬、「高麗の犬」ですが、形は獅子も狛犬も同じで、明らかに元の型は両方ライオンです。

遙かなる大陸から、古代に、狛犬が渡ってきた道は、シルクロードです。日本に狛犬の祖先が、気が遠くなる程長い時を経て、渡ってきたのです。

狛犬の祖先が我が国に入ってきた頃は、誰もライオンという猛獣は見た事もなく、比較対照するものもありませんでした。古代の人々は、仏像、仏具とともに、長いたてがみを持ったこの猛獣を見て、驚き恐れたことと思われます。「獅子」は、書いて字の如く、ケモノ偏に「師」、この世の最強の生き物である、ということ、強く思ったことが感じられます。

狛犬が仏教伝来と共に入ってきた頃は、左右が「獅子」、平安時代は向かって左側は角の生えた「狛犬」、向かって右側が角の生えていない「獅子」、江戸時代に入ると、向かって左側が角の生えない「狛犬」、向かって右側が角の生えない「獅子」となって来ました。今では左右一對が狛犬となりました。

狛犬は、古来より霊獣とされ、神域に邪気が入るのを防ぐ魔除けとしての役割を担ってきました。

石製のものを多く目にしますが、他にも社殿内に置かれる木製や、陶製のもの、また金属製のものなどがあります。神社にあるのが一般的ですが、寺院でも稀に置かれることがあり、東大寺南大門のものが石製としては我が国最古のものとされています。

また宮中では、几帳(きちょう)の裾に置く重石として木製の狛犬を用いていたようです。

昔の人は、狛犬の魔除けの力を借りて、身体の痛むところがあると、その前で、腰が痛む人は狛犬の腰を、足が痛む人は足を撫で、痛みのもとになっている「魔」を封じてもらい、早く痛みが取れるよう祈願したと言います。

また狛犬は、向かって右の犬は口を開いて「あ」の発音、左の犬は口をつぐんで「ん」の発音をしています。これは、神様や人間の言葉をよく理解できる事を表すと言われています。

私どもの神社の本殿の狛犬は天保9年に建てられたもので、川崎市の地域文化財に指定されています。神社によって狛犬の違う形態を観るのも楽しみの一つではないでしょうか。



柿生郷土史料館催物案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日：4月1・15・22・29日(毎土曜日) 5月7・21・28日(毎日曜日)

◎開館時間：午前10時～午後3時